



潮風



平成 30 年度

1 月号

掛川市立大浜中学校

ー「掛川市平和を考える自由研究・作品展」で本校生徒が市長賞、教育長賞を受賞ー

掛川市が主催する「平和を考える自由研究・作品展」において、3年生の川口梨子さん「平和であるために」が市長賞、川口奏さん「今できること」が教育長賞を作文で受賞しました。梨子さんの作文には、毎夏、本校で行われる「平和学習講話」が、平和を考える学びの機会であったと記されています。改めて毎年、講話をしてくださる掛川市遺族会（顧問川口様）に感謝申し上げます。



「平和であるために」

3年2組 川口梨子

「戦争」という言葉から色々なことを連想しました。「生きて帰れない」「兵器を持ち争う」「殺し合い」「ご飯がたくさん食べられない」などといった黒くて闇のようなイメージができる言葉が連想されました。

私が思うことは、なぜ戦争をし、人々が命を落とさなければならないのかということです。戦争をするために、そこで命を落とすために、人は生まれてきたわけではないのに。昔は戦争をして亡くなった家族が一生消えない悲しみを抱えながら日々を過ごしたと思います。人々は幸せに生きるために生まれてきたんだと思うし、昔の戦争中のような世の中ではなく、明るい世の中になってほしいと願っているはずです。

戦争になる前に、戦争をしてしまったらどうになってしまうのかや、世界はどうになってしまうのか、ということをよく考えてほしいと感じました。

それ以外に思うこととしては、戦争中の食べ物についてです。戦争中は食べ物がとても質素でした。お米を食べるときはお粥や雑炊にし、米をふやかし量を増やしてお腹を満たしていました。お米の代わりの主食として、かぼちゃやさつまいも、そらめめなどを毎日食べていたと知って、これだけでは絶対にお腹いっぱいにならないだろうと感じました。（中略）

私は社会の時間で平和学習講話を受けるまでは、戦争をやってはいけないということは何となく分かっていたのですが、この講話を機会に、人の命が奪われ、悲しみ、苦しむということが加えられて、改めて考えることができました。

今は、朝起きたら温かいご飯が食べられ、昼は学校に行って授業を受けることができ、夜はお風呂に入り気分よく寝られます。そんな毎日は私たちからしたら当たり前の日常だけど、とても幸せなことなのだとよく分かりました。これから先も、ずっと平和な国であるようにするためには、みんながもっと戦争についてよく考えることが必要だと思いました。

梨子さん、奏さんの作文を読んで、私は改めて近年にノーベル平和賞を受賞した二人の女性を思い出しました。2014年のマララ・ユサフザイさん（パキスタン）と2018年のナーディーヤ・ムラードさん（イラク）です。お二人とも自国の治安が安定しない中、女性差別や平和の大切さについて訴え、活動されました。マララ・ユサフザイさんについては、図書室に本があるのでぜひ読んでみてください。

(校長 堀内祥行)



—中学生の主体的参加を目指す地域防災訓練—

12月2日（日）に掛川市地域防災訓練が行われました。今年度は地区の御協力で、防災訓練の中で中学生に活躍の場を設定していただきました。

当日は各会場で中学生が活躍する場面が多数見られました。実際に災害が起こった場合に、各地区で大浜中生が避難の手助けができるよう今後とも校内での防災学習・減災学習を進めていきたいと思ひます。

改めて本活動に際して事前の打ち合わせから学校に足を運んでいただいた地区長様、地区防災担当の皆様、本当にありがとうございました。



—「赤い羽根共同募金」「歳末助け合い街頭募金」御協力ありがとうございました—



福祉委員会によって校内で行われた「赤い羽根共同募金」は総額 10,436 円となり、福祉委員長金原愛斗さんによって掛川市共同募金委員会に無事寄贈することができました。（その様子は生徒昇降口に掲示してあります。）

また、大東明社協による大東地区 10 店舗で展開された「歳末助け合い街頭募金」には、本校生徒もボランティアで 40 人以上が参加し、合計 351,661 円の募金額を達成することができました。御協力ありがとうございました。

